

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24年 6月 14日現在

機関番号：36101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520305

研究課題名（和文） グレアム・グリーンメディア表象—投書と映画

研究課題名（英文） Graham Greene's Representation: Letters to the Press and Film

## 研究代表者

阿部 曜子（ABE YOKO）

四国大学・文学部・教授

研究者番号：60294732

## 研究成果の概要（和文）：

本研究は、グレアム・グリーンが、メディアに強い関心を持ち、メディアを戦略的に使ってきたことに注目し、その表象の在り方を考察するものである。グリーン研究の中では、周縁的な資料とされさほど論じられては来なかったが、グリーンは膨大な量の投書を新聞や雑誌に送り続け、また数多くの映画批評を書いてきた。時代的言説空間を視野に入れつつ、それらを分析・検証することにより、グリーンが大衆文化装置としてのメディアの力学を熟知し、それらを巧みに取り入れ自らの領域としていたことなどを明らかにする。

## 研究成果の概要（英文）：

This research sets out to investigate Graham Greene's way of representing his world view in the media, focusing attention on his deep interest in the media and his strategic use of it. Although Greene left behind numerous letters to the press and film critics, little attention has been given to the fact. Analyzing these materials in view of historical-cultural context makes it clear that Greene had full knowledge of the dynamics of the media as a popular cultural device, and he adopted it dexterously as his field.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

## 研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：グレアム・グリーン、メディア、投書、表象、映画

## 1. 研究開始当初の背景

2004年、生誕百周年を迎えたことを機に、グレアム・グリーン足跡や作品群を俯瞰しようとする動きが見られるようになった。例

えばその生涯については、マイクル・シェルデン、レオポルド・デュランなどによる伝記に続き、ノーマン・シェリーの『グレアム・グリーン生涯』第三巻（2004）が発行され、

一方で主要作品の新たな視点からの読み直しもされつつあり、カトリック小説そのものの概念の再定義をすることからグリーン文学を見据えようとするマーク・ボスコ、『グレアム・グリーンのカトリック的想像力』(2005)や、語りの技法を伝記的視点からのアプローチで捉えるマレイ・ロストン、『グレアム・グリーンの語りの戦略—主要作品についての研究』(2006)等にそのような傾向が表われている。

このような動向の中、国内においては世界初となる『グレアム・グリーン文学事典』(山形和美編、2004年)が編まれ発行されたが、本研究代表者は、執筆者7名のうちの一人として、この事典作成に参画する機会を得た。その作業プロセスの中で浮かび上がってきたのは、20世紀第二世代の作家として、オーデン・グループたちとは異なるスタンスで歩んできたグリーンの特異な生き様であったが、それを特徴づけるものは、必ずしもこれまで注目されてきたような、そして作品の中でも表出されるとみなされてきたような、グリーンの特異的なカトリシズムや挑発的に見える政治的言説ばかりではない。グリーン独自の独自性は、メディアへの強い関心とメディアを巧みに使うその手法にもある。そのことは、グリーンが死と前後して出された、クリストファー・ホートリー編集によるグリーンが書いた投書集『投書狂グレアム・グリーン』(1989)と、デイビット・パーキンソンが編んだグリーンが書いた映画批評集『グレアム・グリーン映画評—暗闇の中の朝』(1993)という2冊の大作の存在が如実に物語っていると言えるであろう。揺れ動く20世紀の世界情勢を見据えつつ、グリーンはエッセイや記事と共に、膨大な数の投書を『タイムズ』や『スペクテイター』に送り続け、また映画という大衆メディアに鋭い眼差しを向け続けた。

これらグリーンによる投書やジャーナルへの記事、さらに多くの映画批評は、リチャード・グリーン編『グレアム・グリーン、手紙の中の人生』(2007)に収められている書簡や、イアン・トーマソンの『グレアム・グリーンが「タブレット」に寄せた信仰についてのエッセイ』(2006)で紹介された書評等とともに、グリーン研究に周縁から新たな光を投げかける素材となり得ると思われる。それに留まらず、グリーンがメディアへの関わり方やその表象について検証することを通して、メディアと文学の関係性を考察する足掛かりを得られるのではないかと思われたので、本研究に着手することにした。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、グレアム・グリーンとメディアへの関わり方やその表象の在り方を、明らかにすることであるが、グリーンが新聞や雑誌に送り続けた多くの投書の集積は〈印刷メディア〉への、映画という視覚表象に向けられた高い関心は〈映像メディア〉への飽くなき挑戦として捉え、研究を進めた。具体的には以下のことを明らかにすることを目標とした。

(1) グリーンが書いた投書の特性、及び投書というメディア形態であることの意義

グリーンが『タイムズ』や『スペクテイター』に寄せた投書がどのような言説空間で書かれたか、時代背景・社会背景等を吟味しつつ、その特質や傾向を分析する。さらにグリーンがあえて投書という一つのメディア形態を選び取ったことにどのような意義があるのかを考察する。

(2) グリーンによる投書や寄稿による報告記と小説の関係

グリーンは仏印戦争下のインドシナ半島

をしばしば訪れ、そこで見聞きしたことを記し新聞社などに送っているが、それらは同じ時期に書かれたフィクション『おとなしいアメリカ人』とどのような関係があるか。あるいはジャーナリストとしてのグリーンと言説は小説の中ではどのようなものとして機能し、意義づけられるか。

(3) グリーンが書いた映画批評と映画理論の内容と特性、及びそれらを取り巻く言説空間

グリーンが 1930 年代を中心に書いた 400 篇以上の映画批評を分析・検証し、その特徴を捉えるとともに、グリーン映画理論がどのようなものであるかを時代的・文化的コンテキストの中で探る。

(4) グリーンにとっての視覚表象として、あるいは大衆文化的装置としての映画が持つ意義

「観るために書いた」というフィクション『第三の男』と、その制作にも参画した映画『第三の男』を検証する。映画化を前提として書かれた小説は、映画の先行テキストとしての小説の可能性を示すものと言えるのだろうか。

### 3. 研究の方法

投書については、『タイムズ』や『スペクテイター』などに掲載されたグリーン投書を一次資料として収集、分析する。ホートリーが編集による『投書狂グレーム・グリーン』に収められた 179 の投書と、ジュディス・アダムソン編集による『省察録』(1990) の中の投書を抜粋して、それらを中心に行うが、これらの中に収められていない投書や二次資料を探すために、ロンドンの大英図書館に赴き、収集に努めた。

### 4. 研究の成果

#### (1) グリーンの投書

グリーンが新聞社や雑誌社に寄せた投書の数は膨大なものであり、もし書籍として刊行されたなら 2 巻には及ぶだろうと言われていた。なぜかくも多くの投書を送り続けたのか、またそれらはどのような特質があり、投書という形態をとることにどのような意味があったかなどについて考察するために、一次資料としての投書を探し、読み、分析した。その結果、次のようなことがわかった。

グリーン投書が出された先、その内容は多岐に渡る。高級紙『タイムズ』、発行部数最大の保守派の『デイリー・テレグラム』、中道左派の『インディペンダント』、カトリック系週刊誌『タブレット』などに寄せられた投書を読むと、階級社会にイギリスにおいて、新聞や雑誌がそれぞれ固有の読者層を持つことを知悉していたらしいジャーナリズム出身のグリーンが、目的や内容に応じて提出先を使い分けていたことが伺えた。内容も様々で、第二次世界大戦後の米ソの対立や、冷戦構造のグローバル化が広まりつつある中で、極めて深刻な状況に対して冷静あるいは辛辣に政治的言説を吐いたものがあるかと思えば、自分の作品や映画についての批評に怒りの感情も露わに反論した投書や、特定の投稿者とお互いの文章表現をめぐっての批評の応酬にまで及んでいるような投書もある。その分類は容易ではないが、1930 年代から 1950 年代に焦点を絞った場合、この時代のグリーン雑誌などへの投稿は、インドシナ情勢やキューバ革命など世界的状況へのコメントを中心とした「政治的言説」と、検閲や表現の自由についての問題や作家の権限など「表現することをめぐっての言説」に大別できそうに思われたが、グリーンの場合、両者は「反権力」という共通項を軸に密接に絡み合っていることの検証を行っ

た。

まず活字メディアとしてのイギリスの新聞が持つ特質と、その時代の言説空間を押えておくために、その文学的ジャーナリズムからの系譜を辿り、さらに二つの世界大戦を中心に捉えつつ、共同体としてのイギリスという国家やイギリス人の像が形成されていくプロセスを時代状況の中で概観した。そして作家として立つ前のグリーンが『タイムズ』社で勤務していた時の経験を、自伝『ある種の人生』の中から拾い上げる中で、若い頃に培われた編集者や書評家としての腕が、投書マニア、グリーンの地盤形成に寄与していたらしいこともあわせて確認した。

次に表現の自由に纏わる投書の分析と検証に関しては、グリーン自身の映画批評がきっかけとなって引き起こした 1930 年代後半の「 temple 誹謗事件」をめぐる投書と、猥褻表現をめぐる出版社が提訴された 1954 年の事件を取り上げ考察した。前者の投書群では「対ハリウッド」という形でグリーンの反米感情が醸成されていったことを確認でき、また後者の投書群の背景には、当時その猥褻性に関して話題を呼び、英米では発売禁止になったウラジミール・ナボコフの『ロリータ』をいち早く世に推したのがグリーンであったという事情などを明らかにすることができた。

続いて、チャーリー・チャップリンへの公開状と言う形で『ニューステイツマン』にグリーンが出した投書は、アメリカから国外追放という憂き目に合っているチャップリンへの激励文であると同時に、痛烈なマッカーシズム批判であり抗議文であることを示し、その後フルシチョフのアメリカ公式訪問にみられるいわゆる米ソの冷戦の雪どけ時にグリーンが『デイリー・テレグラフ』に送った投書などとあわせて、反米という旗印の下

での政治的言説の検証を試みた。

投書を書く時、グリーンは、作家と個人、プロとアマチュアという両方の顔を併せ持ちながら、フィクションと現実の危うい境界線上で書いている。時代や社会を映し出す鏡でもあり、コミュニティ形成の場ともなり得る〈投書〉というメディアを通して、グリーンは世界に関わっていたのである。以上のようなことを論文としてまとめた他、投書を中心としたグリーンジャーナリストとしての種々のメディア表象が、その死後徐々に解明されつつある彼のスパイ活動をカモフラージュさせるものとして機能しているという説を、四国大学言語文化研究所の共同研究プロジェクトの中で発表した。

しかし、その数の多さのため、1950 年代以降のグリーンによる投書については十分に分析と考察ができなかったため、今後の課題としたい。

## (2) グリーンのジャーナルへの記事と小説の関係

グリーンが新聞や雑誌に送った記事（投書及び、新聞・雑誌社からの依頼によるもの）と小説等の作品群との関係についての考察は、1950～60 年代にグリーンが『サンデータイムズ』や『ライフ』などの雑誌や新聞に寄せた記事を分析することと、この時期に書かれたベトナムを舞台とした小説『おとなしいアメリカ人』（1955）を併せ読みつつ吟味するという方法により、この時期、何度もインドシナ半島を訪れたグリーンの足跡を辿りながら行い、メディアを通じたグリーン表象の在り方を探った。

1950 年代前半にグリーンは第二次仏印戦争下のベトナムを 4 度訪れ、しばらく滞在している。地雷の隙間を縫うようにしてカトリック司教区の村や要塞化された村に行った

り、爆撃機に乗せてもらったりという死と隣り合わせの取材を行い、そこで見聞きしたこと感じたことを、『サンデータイムズ』や『スペクテイター』に送っている。それらの記事や投書を読むうちに、そのいくつかの部分が、そのまま小説『おとなしいアメリカ人』の中で、語り手であるイギリス人記者の言葉として語られていることを確認した。この小説の中では、事実をそのまま伝えることが記者としての自分の使命だと信じ、何事にも巻き込まれないことを信条としていた語り手が、取材しつつヨーロッパに向けて報告文を書き送るうちに、徐々に無色透明ではいられなくなっていくことが示される一人称の語りによる物語であるが、これはこのテキストが、「語ることや書くことについて語っている」物語、すなわちメタフィクションとしての構造をもつものであることなどを指摘した。言い換えれば、出来事を言葉によって伝えるとはどういうものであるかをフィクションという形式で問うているのでもあり、ジャーナリストグレアム・グリーンを小説家グレアム・グリーンが凝視しているのとも言えるであろう。

さらに取材するグリーンの足跡を辿るうちに、テキスト内部を流れる時間軸(1952年まで)と、実際のグリーンが取材をした日時(1955年の決戦まで)の間にはズレがあることがわかったが、このズレは、フィクションと言う虚構世界と現実世界との境界線を曖昧にするための一つの装置になり得ていることを明らかにした。また、テキストの最後に記された日付が示すものについての本研究の推論もいくつかの根拠に基づき提出し、日本キリスト教文学会での全国大会で研究発表し、また論文にまとめ、学会誌に掲載された。

### (3) グリーンと映画

映画が潜在的に持つ力を「破壊的なカタルシス作用」とするとベンヤミンが述べたのとはほぼ同じ頃、大衆文化としての映画が持つ底力に、英文学の領域からいち早く注目していた作家の一人がグリーンである。彼は1935年から4年半の間に実に400編以上の映画批評を書いて『スペクテイター』等に載せている。それらを読むほどに浮かび上がってくるのは、グリーン映画に対する幅広い知見と、映画という映像メディアが持つ力に対する信念のごとき確信であった。第二次世界大戦前後、テレビという電子メディアが登場するまでのイギリスにおいて、主要な大衆文化であり、かつ視覚表象の手段であった映画をグリーンがどのように捉え、関係性を築き上げていったかを考察した。

まずグリーンによる映画批評の特質などを具体的に列挙しつつ確認し、特にその中でも散見されるグリーン反米感情が、アメリカ制作の映画や、ハリウッドに市場を拡大しようとするイギリス制作会社に、そしてアメリカに渡ったヒッチコックに手厳しく向けられていることをピックアップした。また「 temple 事件」での訴訟を引き起こすに至った経緯についての、シニカルな記し方などについて具体的に検証して行った。

さらに「映画を語ることについて語る」という映画批評への自己言及ともいうべき、グリーン映画についてのエッセイ「それは批評か？」を取り上げ、一般の映画批評への辛辣な批判を通じて、それらを批評している自らの行為をも批評するという論述方法や、最も有効な批評の手段として「風刺」(satire)を提唱している事など、表現者グリーン独自の論評を確認した。

次に、映画と文学の関係をグリーンがどのように捉えていたかを考察するために、「映

画のために書いた作品である」と自ら分析している小説『第三の男』の序文を精読し、作品背景としての、第二次世界大戦後のヨーロッパの混沌とした言説空間や、グリーンメディア観を読み取っていった。そしてこの序文が、小説という言語中心のメディアによる表象から映画という視覚メディアへの変換の可能性に挑戦しようとする表明文であると同時に、それまでの映画批評の中ではアメリカ資本に攻撃的であり続けたグリーンが、自らもこの映画制作に参画するプロセスにおいてハリウッドを受け入れる姿勢を示すものであると指摘した。アメリカに対するそれまでとは異なるグリーンのような柔軟さや寛容さは、グリーン自身のポリティカルな側面を示すものでもある。

グリーンは映画を、小説や演劇という従来の表現形式と同じパースペクティブで捉えつつも、その視覚表象による効果の可能性や、映画が本来有する大衆性や政治性を鋭く見抜き、このメディアに新たな可能性を見出していた。こられのことを論文としてまとめた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 阿部曜子、「グレアム・グリーン、映画という戦略」、『言語文化』、四国大学言語文化研究所、査読無、第9号、2011年、pp. 1-15
- ② 阿部曜子、「ルポルタージュとフィクション—インドシナ戦争下のグレアム・グリーン」、『キリスト教文学研究』、日本キリスト教文学会、査読有、第28号、2011年、pp. 102-113
- ③ 阿部曜子、白井宏、佐伯雅宣「文学における境界・越境」『言語文化』、四国大学言語文化研究所、査読無、第7号、2009年、pp. 12-42

- ④ 阿部曜子、「グレアム・グリーンにみる<投書>というメディア その1—1930～1950年代を中心に—」、『四国大学紀要人文・社会科学編』第32号、査読無、2009年、pp. 17-30

[学会発表] (計 1件)

- ① 阿部曜子「グレアム・グリーンとインドシナ戦争」、日本キリスト教文学会、第39回全国大会(桜美林大学)、2010年5月9日

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

阿部 曜子 (ABE YOKO)

四国大学・文学部・教授

研究者番号：60294732